

所 属：船橋市立行田中学校

氏 名：高橋 美由紀

1 実施学年及び教科・領域

中学校第1学年社会科（歴史的分野）

2 学習のねらいと博物館の活用との関連について

（1）单元名 「貴族社会の発展」

（2）ねらい

① 学習指導要領との関連

本単元は、中学校学習指導要領社会編・歴史的分野の目標（2）「歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。」ことを目指し、内容のB「近世までの日本とアジア」の（1）「古代までの日本」のイを受けて設定した。

7世紀末から11世紀半ばにかけてのこの時代の特色として、人びとが文字を積極的に学び、様々な場で「文字による記録を本格的におこなうようになった」ということと、「国家のしくみがととのった」ということがあげられる。

7世紀後半から、中国や朝鮮半島の政治制度や技術を取りいれながら、日本列島に律令にもとづく国家が急速に形づくられた。新しい国家は、中国にならって整然とした都をつくり、中央に権力を集中するための官僚制をととのえて、法律と文書によって人びとを支配した。

国家のしくみがととのうとともに、日本列島の社会も、次第に形づくられていった。政治の中心地には都市がつくられ、日本列島の各地では、風土の特性を生かした産業がおこり、様々な特産物が生まれるようになった。そして各地の特産物が、税として都に運ばれたり、交易品として各地に運ばれたりして、地域どうしの交流がさかんになっていった。人やモノの交流は、中国や朝鮮半島などの、東アジア世界にも広がりを見せた。国名を「日本」とさだめたこの国家は、唐や新羅・渤海と交流をかさね、日本列島北部の集団である蝦夷や、南部の集団である隼人を国家の外側にいる異文化の人びとと位置づけ、東アジア世界に歩んでいった。

東アジア世界との交流によってもたらされたものの一つに、仏教がある。それが、国家の宗教として位置づけられていくのが、この時代である。この時代の仏教は、政治や文化に大きな影響をあたえた。

様々なしくみがととのい、様々な交流が行われるようになる一方で、様々な問題もおこる。8世紀の奈良時代にととのえられた律令制度のかたちやしくみは、9世紀の平安時代に入ると、政治情勢や社会の実情の変化にともなって、大きく変わって

いくことになる。また、都市がつくられたり、各地で土地開発がおこなわれたりしたことは、都市問題や、自然災害という大きな社会問題をひきおこした。そして、戦乱による殺傷や荒廃が多発した時代でもあった。人びとの生活はゆれ続けていた。

9世紀後半から10世紀になって変化がおこる背景には、東アジア情勢の変化が影響している。日本に強い国づくりへの決意を固めさせた唐王朝は力が衰えて、やがて滅び、新羅・渤海も滅ぶ。こうした国際情勢の激しい流れから距離をおくことで、日本は混乱にまきこまれることを避けようとした。日本と東アジア諸国との政府間の正式な交流は絶えてしまったが、民間での交流はむしろさかんになった。「日本」がうまれてからの最初の400年間も、つねに東アジアとの関わりの中にあった。

奈良時代・平安時代は、「日本」という国名が生まれ、中国からとりいれた制度や文化を少しずつ自分たちのものにして、日本人のものの考えかたや感じかたの礎が築かれた時代であった。

② 単元の目標

○知識及び技能

仏教の伝来とその影響、仮名文字の成立などを基に、諸資料から歴史に関する様々な情報を調べまとめ、国際的な要素をもった文化が栄え、それらを基礎としながら文化の国風化が進んだことを理解する。

○思考力・判断力・表現力等

東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、都の貴族や地方の農民の暮らし、摂関政治と天平・国風文化の特色について、多面的・多角的に考察し、表現する。

○学びに向かう力、人間性等

古代までの日本について、よりよい社会の実現を視野にそこに見られる課題を主体的に追究する。

(3) 博物館との関連

① 活用方法 非来館型活用

② 活用資料

○第2展示室 中世 ①王朝文化

藤原道長の邸宅「東三条殿」の復元模型、王朝貴族の服装(束帯、直衣、狩衣、女房装束)、生活に使う道具のならんだ室内

○歴博公式YouTubeチャンネル 平安時代「寝殿造の調度品と貴族の暮らし」

○『洛中洛外図屏風』(歴博甲本)【仕事・しぐさ】

21. 耕作・施肥(右5) 集めた糞尿を肥料として用いる(16世紀)

35. トイレ(左4) 京都の町に現れた共同トイレ(16世紀)

(4) 指導観

本単元の展開に際し、学級の生徒(男子 17名、女子 19名 合計 36名)を対象に、事前のアンケートを行った。以下はその内容と回答である。

Q1. 古代の都(都市)である平城京や平安京に持っているイメージをもとに、〇〇な都に適切なキーワードを書いてください。そのキーワードにした理由も書いてください。(一部抜粋)

イメージ	理由
上品な都 優雅な都 華やかな都 美しくきれいな都 きらびやかな都 豪華な都	・名前から上品さを感じたから。 ・貴族が和歌をよんだり、蹴鞠で遊んだりしていて、争いがなくお金に困っていない優雅な生活をしていると思ったから。 ・貴族などの位の高い人が多く住んでいたので、都の重要な建物は華やかだろうと思ったから。 ・昔の人がつくったから。権力者が多く集まっていそうだから。
裕福な都 物が豊富な都 美しく豊かな都 お金持ちな都	・様々な出店が出ていて、多くの商売人がいて、経済が回っていたと思ったから。 ・偉い人がたくさんいたおかげで、国が発展して、食べ物に困らなくなったから。 ・都市の人はたくさんお金をもっていて、毎日楽しい生活をおくっていそうだから。 ・京都に今も当時の建物が残っていて、お金がないと丈夫な家や寺は建てられないから。
平和な都 争いのない静かな都	・「平安」という文字が平和と安全の略だと考えたから。 ・「平安」という文字が静かなイメージだったから。 ・平和なことを目指しているイメージがあるから。 ・戦争がなさそうだから。
自由な都 たくさんの人とルールがある都 身分で支配するような都	・身分が上であるほど自由な暮らしをしていたと思うから。 ・たくさんの人が住んでいるのでルールが必要だったから。 ・身分が分かれていて、奴隷のように扱われている人もいたと思うから。
危険な都 戦争ばかりな都 騒がしそうな都 日本風な都	・伝染病が流行したり、霊や宗教関係のことが問題になっていて、いろんな人が苦しんだり混乱していたから。 ・戦争(争い)ばかり起きていたから。 ・都を移動したり、仏像を建てたりして、多くの人が働いていたから。 ・中国から伝わってきた様々なものを自分たちの感じ方や考え方に合わせて、少しずつアレンジを加えて、日本独自の都になっていったと思うから。

Q2. 古代の都(都市)の平城京や平安京には、どのような人が住んでいたのか。
(複数回答可)

貴族(22 人) 天皇・皇族(12 人) 身分の高い人(10 人)
 以下 6 人 普通の人 武士 商人(5 人)
 以下 3 人 農民 庶民 金持ち 以下 2 人 国のリーダー 役人 奴隷
 以下 1 人
 身分の低い人 権力者 大臣 兵士 戦う人 渡来人 外国人 村人 百姓 町民
 平民 大工 大名 きれいな人 舞子 字が読める人 字が読めない人 源氏 平氏
 藤原道長

Q3. 古代日本の人びとから恐れられていたものやことは、何だったと思うか。
 (複数回答可)

地震などの自然災害(14 人) 伝染病などの病気(14 人) 戦争(11 人)
 幽霊・霊・鬼(4 人)
 税金(3 人)
 以下 2 人 死ぬこと 貴族 農民の反乱
 以下 1 人
 食糧不足 夜 呪い 神 寺 宗教 動物 凶暴な動物 爆弾 刀 武器 独裁者
 命令 役人 高貴な人のお金遣いの荒さや乱暴な言動 左遷 地方の豪族 犯罪
 盗賊 外国人

Q4. 古代の都(都市)における社会問題には、どのようなものがあったと思うか。
 (複数回答可)

争いや反乱(10 人) 以下 8 人 身分制度・差別 食料不足 伝染病の流行(6 人)
 経済格差(5 人) 人口増加(3 人)
 以下 2 人 環境問題 文字が読めない・書けない
 以下 1 人
 言葉の違い 犯罪の横行 殺人増加 盗難 いじめ お金のやりくり 税金滞納
 税金高い 霊 宗教 意見がまとまらない 人口減少 人手不足

Q5. 古代日本の人びとは、文字の読み書きができるようになりたいと思っていた。
 (1 つ選んで、記号に○をつける)

- | | |
|------------------------|------|
| A. そう思う…………… | 22 人 |
| B. どちらかというともう思う…………… | 9 人 |
| C. どちらかというともう思わない…………… | 4 人 |
| D. そう思わない…………… | 0 人 |

アンケートの結果から、古代都市のイメージに関して、一番多かったのが「上品な都」「華やかな都」という回答で、3 分の 2 の生徒が都をプラスのイメージで捉える回答であった。理由としては、貴族の華やかな生活から、豊かさや平和を想像している回答が多かった。

都に住む人びとに関しては、「貴族」「天皇・皇族」「身分の高い人」を挙げた生徒が多く

見られた。古代の人びとが恐れていたものやことに関しては、「地震などの自然災害」「伝染病などの病気」を筆頭に、さまざまな回答が見られた。古代の都の社会問題に関しては、一番多かったのが「争い」で、3分の1の生徒が回答している。古代の人びとの文字の読み書きに関しては、ほとんどの生徒が、古代の人びとは読み書きができるようになりたいと思っていたとの回答であった。

以上より、奈良・平安時代についてのイメージや基礎的な知識は多少なりともあることがわかる。

これらの生徒の実態を踏まえ、中単元に関わる「指導内容を見通した一連の学習活動を喚起する学習課題」(以下、「単元を貫く問い」という)と各時間の「問い」づくりは、教師主導または生徒主導で行う。生徒の興味・関心を引き出す教師主導の問いや生徒の興味・関心から出る生徒主導の問いは、教材(中心資料)が重要なポイントとなるので、教材は、生徒の予想と事実とズレがあり、結論が思いがけないもので、生徒にとって矛盾や意外性が感じられるものにする。生徒は、自分の経験や既存の知識や見方・考え方では解釈できない意外な事実や事象に出合うことによって、追究意欲がかきたてられるといえる。また追究によって得られる結論＝答えが、書籍やインターネット等で生徒自身の手で収集でき、生徒の思考で論理的に導かれたものであることが、社会科の学習として求められる教材の質といえる。

問いづくりの内容をしっかりと受けとめ、①問いの解決に向けた予想や計画を立てる、②考えの根拠となる資料を探す、③根拠をもとに解決の考えを導き出す、④問いを達成した活動から新たな問いを生み出す、という一連の学習活動を通して、課題を見出し、協働的に追究し解決を図る力を育み、主権者としての自覚を培いたい。

本単元でも、自我関与していない課題に対して、主体的・意欲的に取り組むことは難しいと考え、課題設定に生徒を自我関与させていく。そのための仕掛けとして、国立歴史民俗博物館の第2展示室中世「都で花開いた貴族の文化」を活用する。具体的なモノに触れることや事象比較をすることで、生徒は既知の事項から新たな観点が導き出されることに驚きと知的好奇心をくすぐられ、主体的に学習しようとする姿勢を引き出すことができると考えている。

小単元では、模型写真や映像、絵画史料などから古代の都(都市)の人びとの生活について、自我関与する問いをつくり、トイレ事情から古代都市を見ることで、社会問題が現代だけの問題ではないことを明らかにする。

3 指導計画（6時間扱い）

時 配	主な学習活動と内容 〔 ○学習活動 □学習内容 〕
1	□学習課題の設定 ○グラフや写真を読みとった後に学習課題をつくる。 《単元を貫く学習課題》 日本の古代国家は、どのような国づくりを行ったのだろうか。 □奈良の都と律令制下の人々の暮らし ○奈良時代の土地制度、税制度は人々の生活にどのような影響を与えたのか、資料などをもとに考える。
1	□遣唐使と天平文化 ○奈良時代にはどのような特色をもった文化が展開したのか、大陸の影響と文化を生み出した担い手の考えを中心に調べてまとめる。
1	□平安の都と摂関政治 ○平安京に都を移したのち、朝廷の政治にどのような変化が見られるようになり、なぜ藤原氏が政治の実権を握ることができたのか、文献や系図などをもとに考える。
1	□国風文化の誕生 ○平安時代にはどのような特色をもった新しい文学や仏教が展開したのか、文化を生み出した担い手の考えを中心に調べてまとめる。
2 ＜本時＞	□古代都市の社会問題 ○古代の都(都市)の人びとの生活について、自我関与する問いをつくる。 ○現代の都市問題との比較の中で、当時の都市問題がなぜ発生したのかを考える。 ○都(都市)とはどういう場であったのか、自分の言葉で表現し、意見交換を行う。 《単元を貫く学習課題に対するまとめ》 ・「日本」という国名が生まれ、東アジアの文物や制度を少しずつ自分たちのものにしながら国家のしくみがととのえられた。その過程で、日本人のものの考えかたや感じかたの礎が築かれた。 ・物質的、文化的には豊かになる一方で、地震・津波・豪雨・旱魃などの自然災害、都市の衛生問題、森林破壊などの環境問題、伝染病などによる死への恐れ、戦争など、現代人が抱えている様々な問題に、古代日本の人びとも同じように悩み苦しみ、人びとの生活はゆれ続けていた。

4 実践の概要

(1) 小单元名 古代都市の社会問題

(2) 小单元の目標 古代のトイレ事情から都市を眺めることで、都市問題が現代だけの問題ではないことを理解する。

(3) 本時の展開 <2 時間展開>

学 習 過 程	主な学習活動と内容 〔○学習活動 □学習内容〕	時 配 (分)	指導上の留意点 (▽支援 ●評価)	資 料
導入	【一斉講義形式隊形】 □平安京の貴族と庶民(都市住人)の暮らしの比較 ○貴族と庶民の衣食住の比べっこをする。	5	▽貴族や庶民の衣食住に着目できるように提示する。	画像① 画像② 映像① 映像②
展開 ①	【移動しての立ち話(意見交換)】 □問いをつくる T「平安京での人びとの生活上の困りごととは何か。」 □問いを絞る T「話し合いで出た困りごとから、とても知りたいと思う問い(解決したい問い、あるいは気になる問い)を3つ選んでください」「最初は個人で選び、次に班で選びます。」 「班ごとに発表します」	30	▽貴族と庶民の困りごとを分けて考えるように働きかける。 ▽選ぶときには、その問いが、自分がほんとうに知りたいことを知るための問いになっているかを確認する。 ▽本時に使う問いを1つに絞る。	
	【本時の課題】 貴族や庶民(都市住人)はどのようにトイレをしていたのか。			
	T「平安京で、成人1日の大便量が200gだとすればどのくらいの量になるか。人口約10万人で計算しよう。」	5	▽藤原京3万人で計算してみせ、平安京の人口で計算できるようにする。 (答)10万人×200g＝ 20トン÷象4頭	

展開 ②	□問いに対する予想を立て、検証する。 【移動しての立ち話（意見交換）】 ○貴族と庶民の排泄・トイレについて考え、予想を発表する ○トイレ遺構や遺物、『餓鬼草子』の「食糞餓鬼図」から当時の排泄・トイレの様子を読み取る。 T「なぜ都市の人々は、裏庭ではなく道や空き地に排泄するのか。」 T「古代都市のトイレ事情から、どのような問題が発生するか」 T「家の中で下痢をする男」・「^{かくらん}霍乱の女」・「春日権現験記絵」の絵には共通点があるが、何か。 T『餓鬼草子』の「疾行餓鬼」で、犬は何をしているのか。 T 平安京では多くの犬がいたとされる。なぜ、都に多くの犬がいたのか、話し合いましょう。 □トイレの発達 ○トイレの普及と産業の発達について知る。	1 0 1 5 2 0 1 0	▽個人で考えさせた後、班での意見交換をさせ、話し合いの内容を発表させる。 ▽注目すべき部分の画像を拡大し、提示する。 ▽貴族は樋箱などを利用し排泄するが、庶民の家にはトイレがないので、道や空き地で排泄することを確認する。 ▽不衛生な生活空間から感染症が広がる原因にもなることを確認する。 ▽都市の残飯や汚物、死体・孤児・病人を食用としていた犬が、都市には不可欠な存在になっていたことを説明する。 ▽その後、トイレが普及すると、人の糞尿が肥料に活用され、農業の生産力が高まっていったことを説明する。	画像③ 画像④ 画像⑤ 画像⑥ 画像⑦ 画像⑧ 画像⑨ 画像⑩ 画像⑪ 画像⑫ 画像⑬ 映像③
まとめ	□ふりかえり ○平安京という都市について、思ったことをまとめる。	5	●自分がこの授業で学んだことについて振り返ることができたか。	

【主な資料の出所】

画像① 第2展示室 中世 ①王朝文化 藤原道長の邸宅「東三条殿」の復元模型
国立歴史民俗博物館



画像② 『信貴山縁起絵巻』 奈良国立博物館

画像③ トイレ遺構（桶殿＜水洗便所＞）

画像④ トイレ遺物（桶箱，篝火，高下駄，糞石）

画像⑤ 『餓鬼草子』の「食糞餓鬼」 東京国立博物館

トイレが普及していなかったころの排泄風景(12世紀)

画像⑥ 『福富草紙』春浦院本・下巻「家の中で下痢をする男」 兵庫県立歴史博物館

画像⑦ 『病草紙』「霍乱かくらんの女」 京都国立博物館 コレラで下痢をし，口から水を吐く女

画像⑧ 『春日権現験記絵』（巻八）病者と仮屋，（巻十三）残飯を貰おうと座る犬 三の丸尚蔵館

画像⑨ 『餓鬼草子』の「疾行餓鬼」 東京国立博物館 木棺の死体を食べる犬や鳥

画像⑩ 『慕婦絵詞』西本願寺 庶民の家にもトイレが現れたころ(14世紀)

画像⑪ 『洛中洛外図屏風』（歴博甲本）国立歴史民俗博物館

京都の町に現れた共同便所(16世紀)

画像⑫ 『洛中洛外図屏風』（歴博甲本）国立歴史民俗博物館

集めた糞尿を肥料として用いているところ(16世紀)



画像⑪



画像⑫

画像⑬ ウォシュレット便座(現代)TOTO

映像① 歴博公式 YouTube チャンネル 平安時代「寝殿造の調度品と貴族の暮らし」

映像② NHK for School「平安時代の人びとの暮らし」「平安京」

映像③ NHK for School「生ごみやうんちをリサイクル」

5 成果と課題

およそ 400 年にわたる平安時代の都として栄えた平安京は、南北約 5.2 km、東西約 4.5 km の規模を有し、南北に九条と北辺坊、東西四坊から成り立っていた。本単元の実践前、生徒のほとんどが、この古代都市を「上品な都」「華やかな都」と捉えていた。だが、実践後、平安京は、必ずしも住みやすい都市ではなかったことに生徒は気づいた。貴族の華やかな生活から、豊かさや平和を想像していたが、貴族と庶民(都市住人)の排泄・トイレ事情から都市を眺めることで、平安京の影の面を意識し、都市問題が現代だけの問題ではないことを理解した。

本時の展開①において、貴族と庶民の困りごととして、本単元の実践前に生徒が一番多く挙げたのが「争い」であった。だが、貴族の邸宅や調度品、服装が映し出される映像や庶民の絵画資料から人びとの暮らしを眺めたことで、住宅の間取りや冷暖房、トイレ、食料、ゴミ、恋愛事情など、生活に密着する具体的な問題を生徒は挙げてきた。この中から「排泄・トイレ事情」という 1 つに問いを絞りこみ、以下の囲みの展開②へとつなげていった。

都市には人口が集中し、ゴミや糞尿など廃棄物が膨大に発生する。しかし、この投棄の仕方はアトランダムではなく、都市の構造や個々の住宅のあり方と不可分である。

大きな道には側溝があり、水が流れていた。貴族の家では、堀の下に溝を穿ち、側溝から水を引き込んで桶殿(トイレ)を設けた。そこで用を足したり、汚物を流したのである。同様のことは、院政期の成立になる『餓鬼草子』からもうかがうことができる。庶民(都市住人)が道の片側で排泄し、尻ふきの簀木(糞ベラ)やちり紙が散乱している。人びとは下駄を履いているが、「ハネ」を防ぐためである。したがって、側溝にしろ、道端にしろ、いったん大雨でも降れば、大変なことになる、悪臭を放ち、病気も伝染しやすい。一方で、病人や死体に関する問題も深刻であった。飢饉や疫病によって、多くの病人や孤児が発生した。京内の路頭には、人馬の骨が散乱し、放置される死体も少なくなかった。

これらの平安京で発生・肥大していく都市問題の過程で、犬という動物が果たした役割は極めて大きいとされている。家庭や街路・墓地で残飯・汚物・死体などを食べて環境を浄化していた犬が、都市には不可欠な存在になっていた。

展開②では、奈良時代から描きつがれてきた絵画のかたちの一つである絵巻物や屏風絵の絵画史料を数多く提示し、じっくり鑑賞する時間を設けた。絵画史料を授業で活用する場合、教師から一方的に既習知識を確認することもあるが、それよりも生徒自身に読み取らせる方が、学習意欲を喚起することができる。さらにいえば、史料を読み解く中で得た情報がどのような歴史的事象につながり、歴史の展開の中にどう位置づけられるのかを考察させることが重視されなければならない。本実践では特に、庶民の生活について、時には今とは違った世界があったことを読み取らせるように努めた。生徒の感想は、排泄・トイレ事情というテーマの意外性に驚きながら、興味深く授業に参加できたという声がほとんどであった。本実践は、物質的、文化的には豊かになる一方で、現代人が抱えている様々な問題に、古代日本の人びとも同じように悩み苦しみ、人びとの生活はゆれ続けていたことを生徒に気づかせる端緒となる実践になったのではないかと感じている。

最後に今後の課題としては、絵画史料の指導方法を深めていきたい。

【主な参考文献】

- ・ 国立歴史民俗博物館編『わくわく探検！れきはく日本の歴史 2』吉川弘文館、2019 年
- ・ 西山良平『都市平安京』京都大学学術出版会、2004 年
- ・ 大田区立郷土博物館編『トイレの考古学』東京美術、1997 年